

社会科の主張

1 教科で育みたい人間像

社会科では、単に社会に適応して生きる人ではなく、よりよい社会のあり方を追求し続ける「社会に参画し、創り続ける人」を育みたいと考えている。私たちは、社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」と考える。「社会」とは、家族や地域、国家、世界など、何らかのつながりをもった人々の集まりであり、「社会的事象」とは、社会における現在や過去の人々の営みのことを指す。

先人達はある社会的事象に出会ったとき、空間的、時間的な視点から捉え、そのよさや問題点、またはそれに携わる様々な人々の考えを吟味しながら、よりよい社会のあり方を追求し続けてきた。その積み重ねが今の社会の姿を形づくっている。私たちが生きる時代は、SDGsの広がりやAI時代の到来など、人々の生活や社会が急速に変化する中で、新たな価値観がうまれるなど、予測困難な時代を迎えている。さらに、多様性を認め合う動きがある一方で、価値観の違いや利害関係による対立が表面化し、合意を導き出すことが難しい状況も見られる。そのような状況であっても、未来に期待を抱き、よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくために、自己の立場や状況を意識するだけでなく、他者が重視することやその人が置かれた立場を理解したうえで、すべての人々にとって最善の結論を導き、実現を目指し行動しようとするのが大切だと考える。

2 教科で願う子どもの学び

私たちが願う子どもの学びとは、課題解決に向けて、根拠に基づいた自分なりの考えを、よりよい社会の構築に向けて発展させていくことである。子どもたちはある社会的事象に出会ったときに、「解き明かしてみたい」「これはみんなで考える価値がありそうだ」「なぜだろう。おかしいのではないか」などといった思いから、全員で共有する問いが生まれ、社会的事象を追求していく。子どもたちが社会的事象を追求していく過程で「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目してとらえ、比較、分類したり統合したり、地域の人々や国民の生活と結びつけたりしながら考察して、自分なりの考えをもっていく。自分なりの考えを語り合う中で、現実の社会とのつながりを感じ、社会的事象の矛盾や現実とのギャップに着目したり、他者の異なる考えや価値観に出会ったりして、自分の考えを発展させていく。私たちは、このような学びが子どもたちの中で生まれることを願っている。

私たちが願う学びを実現するためには、授業の中で「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善の社会のあり方』を創りあげていく営み」を巻き起こしていくことが必要だと考える。そのような営みには、多様な他者の存在が必要不可欠である。自らの考えをより深めたり、広げたりするために、多様な他者とかがわり、語り合い、考察することが重要である。かがわり、語り合うことで自分だけでは気づくことができなかつた視点からとらえたり、異なる立場に立って考えたりすることで、公正な判断や、より合理的な結論を導くことができる。その過程で対立や解釈のズレが生じたときにこそ、考えの根拠や互いの価値観について語り合い、相手の見方や考え方に対する理解を深め、互いが納得できる社会の姿を見いだしたり、新たな社会の姿を創りあげたりするだろう。